
ワンダーランド・ファンタジー

梶城藍子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンドーランド・ファンタジー

【Zコード】

Z8129M

【作者名】

梶城藍子

【あらすじ】

天真爛漫なビィとその弟ラズの不思議の国の冒険を描きました、ファンタジーです。

タイトルは今考えたので、あまり本作とは関係ありません。
初投稿ですが、御手柔らかによろしくお願ひします^_^(ーー)^_

それは、一つ上の姉のビィと共に侍女に絵本を読んでもらつていた時のことだつた。侍女に読んでもらつている物語は「くありふれた冒険物だつたけれど、それでもわんぱく盛りな姉にとつてはたいへん心の弾むものであつたらしく、ビィは今すぐにでも冒険に繰り出さんとばかり侍女の話す物語に聞き入つていた。

僕はそれに気付かないふりをしていた。そして物語が終わると同時に逃げる用意も万全だつた。なぜならこの姉ときたら、僕がどれだけ嫌がろうが首に縄をひつかけてでも連れて行こうとする人だから。だから僕は物語が終盤に差し掛かると同時に用事を思い出したふりをして立ち上がつた。ズボンについた草を払つて、少しづざとらしく伸びる。そしてそのまま屋敷へと戻ろうとしたのだが、僕にとつて悪魔の物とも言つべき小さな手が、肩にしつかりと触れてしまつたのだった。

「ラズ、あれ見て、あれ！」

予想通りその手は姉のビィの物であったが、彼女の表情は僕の予想と違い、何やら驚いた様子で視線を僕にではなく庭の隅に向けている。

それを追つて目を庭の隅に向けると、そこにいたのは。

「…………」

親バカで僕ら姉弟を猫かわいがりする父。呑氣で少しばかり天然な母。そして破天荒な姉。こんな三人に囲まれていても、この屋敷の次期当主として、僕は常識人であるつと努力する日々を送つてきた。この今までの日々が僕に、この光景を認めさせようとはしない。「あー……つと、そうだ。僕、今日宿題があるんだつた。というわけで、失礼するよ。」

「ちょっと、ラズ！『まかしてんじゃないわよ！あれを見てつてば

！』

片手をあげ、颯爽と駆け出そうとする僕の襟首は見事つかまれ、
ビィの声が耳にキンキンと響く。この姉から逃げられた試しがない
のはなぜなのだろう？

諦めて視線を姉のいうアレに向ける。そこにいたのは、赤いチエ
ックのジャケットに茶色のショートパンツの少年だった。僕と同じ
年ほどに見える少年は、顔と同じくらいの大きさの時計を首にかけ
ているが、それだけなら僕だって見て見ぬふりをしたりはしない。
問題は彼の頭の上だつた。彼の髪は銀というよりも白だつた。そし
て、その白い髪の上に、同じ色の長い耳が生えていたのだ。まるで
ウサギのような。

「……僕は警備に変質者がいたって伝えないといけないから、離し
てくれないかな……？」

「何言つてるの？ あれば白ウサギさんよ！」

どう見ても白ウサギではなく、耳をはやした変質者だ。

「ビィ…。君はもう十二になるんだよ？ 現実を見るべきだ。あれば
ウサギさんなんてかわいらしいものじゃ……。」

「あー！ ウサギさんが行つちゃう！ 追いかけなきや！ 」

「……大体君は自覚が足りなさすぎる。ノクターンの名に恥じない
レディとして行動を改めるべき……。あれ？」

こつものお説教モードに入つていた僕の前に、ビィはいなかつた。
もののすぐ嫌な予感がして、田をアレに向ける。断じてウサギにで
はなく変質者に向けてだ。

「待つて！ ウサギさん！」

この姉に関しては嫌な予感ほど当たるものだ。ビィはワンピース
の裾が翻るのも厭わず、アレの元へと駆け出していた。

「…………ビィ…っ！」

迷つたのは一瞬で、僕は駆け出していた。あの姉に振り回される
のは僕の役目なのだから。

数歩先でビィは芝生の地面を見下ろしていた。あの変質者が転び
でもしたのだろうかと思いつつ、僕はビィの腕を強く掴む。

「ビィ、いい加減に……っ！」

「あ、ねえ、ラズ！あのウサギさんね、この穴に入つてつちゃつたんだけど……。」

「君は相変わらず人の話を……………穴…………？」

ビィの足元にはありえない大きさの穴があつた。直径は僕の身長以上あつて、底も暗くて全く見えない。試しに放つてみた小石が底に着く音も聞こえなかつた。

「こんなものがうちの庭にあるはずがない。ビィ、危険だから少し下がつて。」

「でもね、ウサギさんは入つていつたのよ？ぴょんつて。」

「…………それは彼がウサギだつたからだよ。僕らは人間なんだから入るわけにいかないよ。」

これは決してアレをウサギと認めたわけではなく、ビィを説得するためになにか言つた言葉だ。

「とにかく、警備と父さんに連絡しないと…………。」

「とにかく、ウサギさんが入つていけたなら私たちが入れないわけがないわね！」

僕の言葉とビィの言葉が重なる。だからこそ、僕にはビィを止めることもできなかつた。

「えいっ」

それはなかなかにかわいらしげ掛け声だつたが、引かれた腕に意識が集中していた僕には、そう思えるほどの余裕はない。

「ビィのバカアアアアア！」

僕の叫び声は、その深い穴には良く響いた。

気がついたとき、草の良い匂いがした。まぶしい光に照らされて、視界が開くまで時間がかかつたが、あの穴に入るという非常識極まりない事態が夢だったのだと思えた。僕としたことが、あんな幼稚な夢を見るなんて。

「僕もまだまだ次期当主として自覚が足りな…………。」

「起きて、ラズ！すごいわ！」

遠くから聞こえるビィの声で、完全に意識が覚醒する。

屋敷の庭の芝生の香りだと想っていた草の香りは、田の前に広がる森の木々の香りだつたらしい。空を見上げても穴などなく、快晴といえるほど澄んだ青空だった。

「……ビィ！」

今にも走りだしそうなビィをなんとか留める。おこく瞳がキラキラしているのは間違いなく氣のせいではない。

「す」いわ！あの穴がこんなところに通じているなんて！ああ、このまま進んでいけばお菓子の家でもあるんじゃないかしら！

「あるわけがないから。あんな穴があつたこと自体おかしなことなのに、底が森になつていてるなんて、わけがわからない。動かない方がいいよ。」

両親ならきっと迎えに来てくれるはずだ。しかも屋敷の庭からきたのだから、動かない方が絶対にいい。落ち着きなく辺りを見渡すビィに、冷静に言つてみたものの、まったく聞く耳を持つてもらえない。

「ほら、早く立て、ラズ！早くしないとウサギさんを見失っちゃうわ！」

そう言つてビィは脇田もふらずに走つて行つてしまつた。

「ああ、もう一…ビィはいつもいつも…………。」

文句を言いつつ、僕は自分の口角が小さく笑みを作つていて、「と」を自覺していた。いつも僕を連れまわしてはトラブルを起こすビィに懲りずにつついて行く僕だってまだ十一の子供なのだ。

「飽きちゃった。」

ぱつりとつぶやいて、ビィはその場に座り込んだ。あれから数時間、僕らは当てもなく森の中を歩き続けていた。喋る動物が出てく

るわけでもなく、ましてお菓子の家が出てくるはずもなく、この森は至つて普通の森だったのだ。ビィでなくても飽きてしまつほどだ。「行くつて言つたのはビィじやないか。……それにしても確かにあまり歩くのも賢いとはいえないか……」

ビィの隣に腰掛ける。口にしたりはしないが、僕だつて飽きてきていたのだ。

「ウサギさんもいないし……なんで来ちゃつたのかしら。」

「ビィが来たがつたんだから文句言わないで。やつぱり最初にたどり着いたところまで戻るべきかな……。」

カサリと、僕がこれから行動を思案していた時、脇の木が小さく揺れた。ここは森で、動物でもいるのは普通だろう。それがシカやリスや……ウサギなら問題はない。しかしもし、それがクマや野犬だとしたら話は別だつた。

「もしかして、さつきのウサギさん？」

「それならなおさら後ろに下がるべきだよビィ。」

仮にも大事な姉を変質者に近づかせるわけにはいかなかつた。大きく木が揺れた。その途端に僕の目の前に真っ白な髪と、長々しい耳が飛び出した。

「ウサギさんつ！」

ビィの嬉しそうな声を無視して、アレは僕らの脇を掠め、走り去る。安心半分、焦り半分。僕はそれを呼びとめようと決めた。ここがどこなのかわからない以上、少なくとも話が出来そうな生き物を見逃すわけにはいかなかつたのだ。しかし……。

「ウ、ウサ……？」

あれは本当にウサギなのだろつか？なんといつて呼びとめれば、アレは立ち止まってくれるのだろ？？悩んでいるうちにウサギの背中は小さくなつていぐ。「はあ……はあ……早く行かないと、女王陛下がお怒りだ……つ」と独り言をつぶやきながら。

「待て待て！ウサギ！今日の晩御飯はウサギ鍋だ！」

「待て待て！白ウサギ鍋！」

未だにあれを何と言つて呼びとめればいいのか考えている僕の耳に、聞き慣れない声が二つ届く。振り返ると、僕らには田もくれず、二人の少年が走り去り去りしていた。

「ねえ！」

彼らはビィのたつた一言で立ち止まつた。なるほどそつ言えばいいのかと僕は心に刻みつける。難しく考える性格も考え方のだった。

「なんだい？ 僕らは忙しいんだ。」

「そうだよ。ウサギ鍋が逃げちゃうんだ。」

彼らは双子だった。年はウサギや僕らと同じほど。同じ色の白いシャツに群青のショートパンツ。それにサスペンダーまで同じ色で揃えていて、黒い髪や金の瞳まで同じ色だ。まるで鏡の前に立つているかのように思えるほど、彼らは似ている。発言を見る限り性格も同じのようだ。

「私たち、迷子なの。この辺りにお菓子の家はないかしら？」

ビィの質問に双子たちは互いの顔を見合す。僕でさえ何を言つていふのだとと思うのだ。初対面でこう聞かれては戸惑つのも当然だろう。

「お菓子の家なんて探しているの？ 辞めた方がいいよ。アリまみれでとても食べられたものじゃない。」

「ハチがハチミツもかけていつたからクマも集まつているよ。あいつら意地悪だから分けてなんてくれないよ。」

「アリまみれ？ なんて気持ち悪いの！ そんなのいらぬいわ！」

.....

「待つて……あるの？ お菓子の家が……？」

なぜか三人の会話が成立してしまつていた。まともなのは僕だけなのだろうか……。

「あるさ。でも僕ならあんなお菓子を食べようなんて思わないね。賞味期限つて知つているかい？」

「あれはいつから建つているのかわからないんだ。とっくに腐つているよ。」

双子たちには僕らのほうが常識のないようと思えるらしい。納得はいかないが、僕はそれに気付かないふりをして質問を続ける。

「………… なんだ。といいで、いじがどこだか君たちはわかる?」

「どこって、森だよ。」

「森以外のどこだって言つんだい?」

「森に決まってるじゃない。ラズつたらわかりきつたことを聞くんだから。」

ねー。と顔を見合わせる三人。ノクターン家嫡男としてのプライドがズタズタにされた氣分だった。

双子は僕とビィを見て、互いに顔を見合わせる。そして大きく頷きあつた。

「君たちは迷子なんだよね? 案内ぐらいならしてあげなくもないけど……。」

「僕たちの出す条件をのんでくれるなら案内してあげる。」

双子は同じ顔に同じ笑みを浮かべて僕らを見つめる。条件と聞けば簡単に頷けるわけもなく、僕はわざとらしく腕を組んで考え込んだ。

「その条件……。」

「いいわ。その条件のんあげる!」

その条件とは? そう尋ねようとした僕の声を遮りつて、ビィは簡単にそう言つてしまつた。

「………… 待つて。ビィ、頷くのはきちんと条件を聞いてからにしないと……。」

「「「じゃあ契約成立だね!」」

またしても僕の言葉は遮られ、双子たちとビィはお互に握手を交わしていた。まるで僕なんてこの場に存在していないんじゃないかつてくらいの放置状態だつた。

「それで、条件っていうのは?」

ビィの遅すぎる質問だった。

双子たちは再びお互いの顔を見合させ、にんまり笑う。そして僕

にとつてはかなり難題といえる条件を軽々と口にしたのだった。

「「僕らの友達になつてくれるならいいよ！」」

「私は、ヴィオレッタ・ノクターん。ビイでいいわ！」

ノクターん家のレディらしく、ビイは一人にお辞儀する。貴族のレディがする礼だ。それにだけは少し安堵した。

「……ラザフォード・ノクターんと申します。親しい方たちからはラズと呼ばれています。」

「あら、ラズつたらお友達に對してなんて硬い挨拶をするの？もつとかわいらしくすべきだわ！」

胸に手を当て、父の知り合いにする時と同じように丁寧な挨拶をしたのだが、ビイはそれが気に入らなかつたらしい。姉らしく説教していくが、普段し慣れないせいかなんとも説得力がない。

言い争う僕たちをしり目に、双子も自己紹介を始めたのだが……。

「僕はトウイードル・ディー！」

「違うよ！今は僕が『ディー』だ！」

「あれ？ そうだけ？なら僕はトウイードル・ダム！」

「でももう交代の時間は過ぎてるかも。僕がトウイードル・ダムだよ！」

双子はどちらかがトウイードル・ディーで、どちらかがトウイードル・ダムというらしい。しかしながら交代の話が出てきて、今はどちらがどちらなのかで揉めている。こういつてはなんだが、先ほどこの兄弟に常識を疑われたのかと思うと、やはり納得がいかなかつた。

「なら私が決めてあげるわ。あなたが『ディー』で、あなたがダムね。当然のようにビイが一人のどちらがどちらかと決めてしまった。

そもそも双子とはいえ名前を交代というのはしてもいいものなのだろうか……。

双子もまさか初対面の少女にそうきめつけられるとは思つていな

かつたらしく、またも顔を見合させていく。しかしすぐにまた笑顔になり……。

「君がそういうなら僕がディーだ。」

「うん！僕がダム！」

満足そうなビィと、ディーとダムの兄弟。だんだんと自分の常識が蝕まれていく気がした。

この後、数回双子たちのいたずらでシャツフルが行われ、ビィらがディーでダムなのはまたわからなくなってしまった。

双子の調子外れの鼻歌を聞きながら、どれくらい歩いたことだろう。もしかしたらビィと一人で歩いていた時よりも長く歩いているかもしね。僕としたことが、もっと重要な質問をしそこなつたのだ。

「……………どこに向かっているの…………？」

どこに行きたいのかも聞かず、双子は自然のように歩きだしたのだ。てっきりどこか迷子にふさわしいところでも知っているのかと思つてきてみたものの、数時間近く歩き続けていると、やっぱり不安になる。

しかし双子はさも当然のように、声をそろえる。

「「さあ？僕たちはこの道を歩いているだけだからね。でもきっとどこかに繋がっているよ。道があるんだから。」「道の定義がわからなくなってしまった。」

「そうよね。目的地を決めるなんてもつたいないわ！お菓子の家があるような森だもの。他にもいっぱい不思議があるに違いないわ！」スキップをしそうな勢いのビィを田でたしなめる。もちろん効果は薄いが、それでもスキップだけは阻止出来たようだった。

「ビィの言つ不思議つてどんなこと？」

「お菓子の家が不思議なら、なんでも不思議になっちゃいそうだね。どんな不思議が見たいの？」

口に人差し指をあて、ビィは歩きながら考えている。一体何を言
い出すのやら、あまりおかしなことを言い出さないでほしいものな
のだが。

「やっぱり小人さんかしら？宝石掘りの小人さんのおうちで住みた
いと思っていたの。」

もはやどこに突っ込んでいいのやら、見て見ぬふり、聞き聞かぬ
ふりをすべきか。僕は小さくため息をもらす。

しかし双子には心当たりがなかつたのか、声をそろえ、首も同じ
動きで傾げている。

「「小人さん？それって、ラズみたいな大きさの？」」

「僕は小さくない。まだまだ成長途中なだけだ。」

「ラズよりも小さいの…このくらい！」

僕の言葉を無視し、ビィは手を膝にあて　　ビィの腰ほどだから、
およそ七十センチほどだ　　まるで見たことがあるかのように言つ。

「小人は見たことないね。」

「うん。小人はいないね。」

ビィの説明を聞いて、少し残念そうに言つたあと、双子はまた顔
を見合わせ、とても元気よく言つた。

「「でも大アオムシならいるけどね！」」

後ろで何かがうごめく音がした。

昔、大きな花束をもらつたことがある。あれは僕のバイオリンと
ビィのピアノのコンサートのことだった。カラフルな花束にビィ
は大喜びで、それをすぐに自室のベッド脇に生けさせた。その夜だ
った。部屋数も三十ではきかないだろう屋敷の隅から隅にまで、ビ
ィの悲鳴は響き渡る事件が起こつた。ビィのベッドに、ある数セン
チほどの生き物が乗つっていたのだ。

それ以来ビィは、アオムシが大の苦手である。

「きや つ……」

「ビィ、待つ……！」

顔を青白くしたまま、ビィは双子の片割れの手を掴んでものすごい勢いで走つて行った。伸ばした腕がむなしく虚空をつかむ。

僕たちの後ろにいたのは、双子の言うとおり、大アオムシだった。しかもキセルを吹かせて、生活に疲れた顔をしている。つまり人面アオムシだ。特大の。

ビィでなくとも逃げ出したくなる、出で立ちだつた。そして大アオムシは聞こえるように大きく舌打ちし、これだから女は……。と咳き、去つて行つた。なんとも傷ついた表情を残して。

そして僕らは別れ別れになつてしまつた。

「とにかく追いかけないと……。」

ビィはあれで逃げ足がものすごく速い。そしてここには名も知らない森の中だ。ここで追い付けなければ、もう一度と会えないかもしない。

「ビィも女の子なんだね。やつぱりあんなしょぼくれたおっさんアオムシに後ろに立たれたら悲鳴もあげたくなるか。」

妙に納得している双子の片割れの腕を掴み、僕は走り出した。

「あ、ラズ！そっちには行かないほうが……！」

珍しく慌てた声に足を止める。しかし時すでに遅く、僕はソコに足を踏み入れていた。

森のほんの少し開けた場所に、森に不似合いな長いテーブルが一つ、真っ白なテーブルクロスをかけられ、置かれていた。その上には貴族が使うような豪華なティーセットに三段のケーキスタンドがあり、オレンジの髪の頭の上に、白ウサギと同じような耳をつけた少年と、顔より大きなシルクハットのせいでその顔が口しか見えなくなつてしまつている少年。顔が見えないのでおそらくはだが

の一人が腰掛けている。

「おやおやおや？お前はトウイードル兄弟の片割れじゃないか。こ
っちは……ダム！ああ、いやディーか？どっちでもいいや！見ない
うちにすっかり顔が変わっちゃって！ああ、いやその顔も悪くはない
いさ。見分けがついてよかつたんじゃないか？いやいやいや、僕は
昔のほうが良かつただなんて毛ぼじもおもっちゃいないよ。たとえ
顔が変わっちゃまつても、双子を名乗るのは君たちの自由だ。さあ、
顔変わり記念パーティーにようこそ！特製の紅茶を君たちにふるおう
じやないか、ダム！あ、いやディーか？どちらでも構わないさ、ど
ちらを名乗ろうとも、僕にはどちらでも変わらないからな。ああさ
あさあ！座つた座つた！」

シルクハットの少年は僕を見て一気にまくしたて、それを聞いた
オレンジ髪の少年が呟く。

「顔変わり記念パーティー……？さつきまでは僕の歯が抜けた記念パ
ーティだつたのに……。つい……僕の記念なんて次にいつ行われる
かわからないのに……。歯も痛い。心も痛い。僕らは親友だと思つ
ていたのに、そう思つていたのは僕だけだつたのかい、帽子屋よう
……？それにそいつはダムだよ……いい加減覚えてあげろよ……脳
みそが空なのはわかるけどさあ……それともお前の脳みそは紅茶で
出来ているのかい……？ああ……それなら納得だ……さあダム、こ
いつの脳みそを割つて美味しい紅茶を飲もう……？」
後半は主に悪口だつた。そして僕はダムだけ？
「僕はダムじゃないつ！」

危うくダムだつたのかと納得してしまいそうだった。

「ならディーだな！」

「ディー、紅茶を飲むためのトンカチを持っているかい……？」
「ディーでもダムでもない！僕はラザフォード・ノクターンだ！」
「ラザフォード？君があのラザフォードかい！なつかしいなあ、
どれぐらいぶりだ？1秒前か、2秒前か？なら再会記念パーティーに
しなきや…さあさあ、座つて座つて！数秒ぶりの再会をみなで

祝おうじやないか！」

「……数秒ぶりってなんだよ……つまりは初対面ってことじやないか……そんな記念より、僕の歯が抜けたことのほうがよっぽど記念パーティにふさわしいのに……。」

陽気すぎるほど陽気にティーカップをセッティングするシルクハットの少年　帽子屋と、この世の終わりに直面したかのような哀愁漂う表情でティー・ポットを温めるオレンジ髪の少年。全く対極な二人だった。

「……い、いらぬよ！ 誰が帽子屋と三月ウサギのパーティになんて参加するもんか！」

茫然とこの二人を見る僕の腕を、今度は双子の片割れ　わかりにくいからディーとする　が引っ張る。しかしその反対の腕を帽子屋とオレンジ髪の少年　三月ウサギが掴み、引っ張る。もうアレがウサギといつことに関しては突っ込まないことにした。

「まあまあまあ、そう言ひなよ、ダム！ あ、いや、ディーだっけ？

「ラザフォード……。」と三月ウサギがフォロー　ラザフォード

ー僕らの紅茶はこの森一美味しいんだ！ ゼひ親友の君にも飲んでもらいたい！ いやいやいや、君が嫌というはずがないのはわかっているよ。しかし、そこにいるディーだかダムだかは僕らの紅茶が気に入らないらしくてね。何度も誘つてもうまいこと逃げられてしまう！ ああ、なんて親友がいのないやつらなんだろう！ ああ、わかっている！ 彼らはほんのちょっとびり照れ屋ただけさ！

右腕が引かれる。

「誰が照れ屋なもんか！ あんなものを飲んでる友達なんていらっしゃよ！」

左腕が引かれる。

右へ。左へ。また右へ。その間も二人の言葉の応酬は続いている。

「わ、わかったから！ 飲めばいいんでしょ、飲めば！」

たかが紅茶だ。そう思った。ディーは紅茶が嫌いらしいが、僕はどうちらかと言えばミルクティーには少々うるさく、この森一美味し

いと血負われるものならば少し興味がひかれた。

だ、だめだよ、ラズ！帽子屋の淹れる紅茶は……。」「

ティヤーの皿葉を強引に無しの上、帽子廻はめくした。そのまゝ

僕の耳に、信じがたい単語が入った。

「泥水？」

ディーが席につかずにはいるのにも構わず、三月ウサギは僕の前に置かれたティーカップに琥珀色の液体を注いだ。しかし、それは紅茶というにはなんだかとても……。

「濁つてゐる。」

「何をいうか、ティーだかタムよ！これは泥水じゃないさ、きちんと過した泥水だ。ううーん、なんとも良い土の香りが残っていて、この森らしさが詰まっているとは思わないかい？この美味しいさがわかるのは、まだ三月ウサギだけなんだ。しかし」いつは味覚オンチなところがあつてね。君が美味しいと言つたらこの紅茶をこれから世界一の紅茶といふことにしよう！」

帽子屋は泥水入りのティーカップを鼻に近づけ、なんとも芳しい香りをかいだような表情をしている。自分が味覚オンチであるとは思わないらしい。嗅覚オンチでもあるようだが。

ちなみにろ過装置とは泥水をそのまま筒に通してホジエで洗ふ
んだだけだった。

「…………わ、悪いんだけど…………少し体調がすぐれないから今日のパ
ーティは欠席させてもらうよ…………。」

一度は行くと言つた以上、断るには相応の理由が必要だ。考えた末に思いついた理由が仮病だつたわけなのだが……。

「おやおや、われはいけない。なにいりやうてこへ」と

いい。ベッドはないが椅子ならあるからね。それに美味しい紅茶とケーキがあれば体調なんてすぐに良くなるさー」

帽子屋にとつて紅茶は万病の薬らしかつた。

このまま、僕はきっとこのパーティが終わるまでこの場を離れることができるのだろうと悟つた。ディーだけはいつまでも僕が席を立つのを待つてくれた。

ああもう、思い出すだけで背中がむずむずしてくる。あの、青い体
正確には縁　　はもう一度と見ない！ええ、絶対に一度と！
私は掴んだ誰かの腕をきつく握りしめて、そう誓つた。すると、
掴んだ腕の主が相変わらず呑気に口を開く。
「さすがビィは来た道を覚えているんだね。ただ闇雲に走つてたわ
けじやないんだ！」

「そ、そうよ！決まつていてるじゃない！」

実のところ、まったく覚えていなかつた。先ほど双子が言つた通り、道を歩いているだけにすぎないのだ。

これはいつもラズに頼りきりだつた罰だろ？自分が頼りな状況になつたことなど今までに一度もない。これからどうすればいいのかも私にはまったく見当もつかなかつた。

「ねえ、そこのかわいいお嬢さん。」

半分泣きそうになつていた私の耳に入つたのは、今まで聞いたこともないくらいの良い声だつた。しかもかわいいと来れば自分以外に対して以外であるはずがない。

「あら、わたしのこと？なにか御用かしら？」

だから私は今まで挨拶した中でもかなりお上品にその声の主へと返事をした。それを見た声の主はにんまり笑う。それは猫耳をつけた青年だつた。木の上で寝そべり、なんとも危険な状態で私たちを見下ろしている。ピンク色の猫を見たのは初めてだつたが、猫の耳をつけていて、長い尻尾が揺れているのだ。猫以外の何者でもない

と思つ。げつとこつ双子の片割れ　おそらくはダムだ　　の声が聞こえた。

「やつそ、君のことだよ。かわいいお嬢さん。こんなところで君のように愛くるしお嬢さんが何をしてるのかな？」

わざとらしくらいのほめ言葉なのだが、落ち込んでいた私の気分を浮上させるには申し分ないものだった。

「弟を探しているの。この子の双子の兄弟も一緒にはずなのだけれど、「存じないかしら？」

「ああ、それなら知つていいよ。でも今どこでいるのかは知らないな。やつを見かけただけ。でも「存じないかつて質問には答えられるよ。答えは「存じある、だ。何かおかしいかな？」

「……いいえ。でもあなた変わつているのね。」

「ビィ、こんなにやけ顔のチエシャ猫なんて放つておいて、早く二人を探そう！」

ダムが慌てたように叫ぶ。ビィやら彼の名前はチエシャ猫といつらしい。なんていい猫なんだろう。せひついに来てもらつて、毎日その良い声でほめ続けてもらいたい。

「ああ、僕の名前はチエシャ猫だよ。そこにちつさこのはトウイードルの片割れだね。こんなかわいらしいお嬢さんを独り占め？」

「別にかわいいから一緒にいるわけじゃないよ、お前と一緒にするな！ビィは僕の友達だ！」

「友達？友達ならぼくらも友達だろ？君たちのよつな子供の相手をする気はないけど、お嬢さんが一緒に話は別れ。わあ、友達の友達は友達。仲良くなようよ、お嬢さん？」

にまにま笑つて、チエシャ猫が言つ。チエシャー猫とせよへ言つたものだ。

「ええ、もちろんよ。私はヴィオレッタ・ノクターん。ビィと呼んでくれると嬉しいわ。」

丁寧にお辞儀をして、レディらしく微笑むが、ダムは慌てた様子で私の前に立ち大声で言つ。

「ダメだよ！」こつはあの女王の手下なんだから！女王は女が大嫌いなんだよ！」

しかし、そのダムと私の間に、木の枝から飛び降りたチェシャ猫が割つて入つてくる。

「そう、よろしくね、ビィ？ああ、でも非常に残念だ。僕はそこの双子と違つて君と共に冒険することは出来ないから。」

「え？」

顔だけにんまり、しかしチョシャ猫の目は笑つていなかつた。

「ヴィオレッタ・ノクターン。君の冒険はここで終わりだよ。」

泥水紅茶は未だにティー・カップに並々注がれている。期待に満ちた表情で帽子屋が見つめてくるが、構うつもりはもはやなかつた。唯一の救いは、ケーキがまだ食べられるものだつたことだろう。パティイが終わるまで、なんとかケーキだけで乗り切ろうと、フォーケでケーキを小さく切り、口に運ぶ自分の行動がなんともむなしかつた。

その時だつた。遠くから笛の音と共に大勢が行進する足音が聞こえ出したのは。

それに気付いた僕を除く三人は心底嫌な顔をして 帽子屋も嫌な顔をしていそうな雰囲気を醸し出していた 音のする方に顔を向けた。

その足音と笛の音は、トランプ柄の帽子と服を着た少年たちの物だつた。みながみな同じ顔をしていて、双子がさして珍しいものでもないような気がしてくる。その中で、一つのスピード つまりはスピードのエース の入つた服を着た見覚えのある白い耳のウサギの少年が、僕たちの前に歩み出てきた。

「君がラザフォード・ノクターンかね？」

なんとも偉そうな、少年にはあまり似つかわしくない口調だつた。しかし自分もなんだか年齢に似合わない行動をとることのほうが多い気がして、彼のことはいえなかつた。

「え、ええ。ぼくがラザフォード・ノクターンと申します。あ、あなたは……？」

この冒険の諸悪の根源はビィであるが、彼女をここに結び付けたのはこの白ウサギ少年である。名前くらいは伺いたいものだつた。「私は白ウサギ。女王陛下の命により、ラザフォード・ノクターンを城へと連行する。」

心の一切こもつていない、白ウサギの言葉だつた。しかし今は彼の感情こもつた言葉が聞きたかったわけではなく……。

「連行……？」

少なくとも僕はここにきて何か悪を働いた記憶はない。少なくとも僕は、客人に泥水を差し出す少年たちを差し置いて、僕が連行？「女王陛下直属の命である。さあトランプ兵たち、この者をハートの城へ。」

後ろに控えていたトランプ服の少年たち　トランプ兵　が、僕の方に手を伸ばしてくる。反射的に身を引いた僕の前に、ディーが割りこんできた。

「ラズは僕の友達だ！あんな狂つた女王なんかにラズを渡さない！さつさと帰れ！」

成り行きでなつたような友達という関係だったが、それでもディーは女王の部下であり、少なくともかなりの身分だろう白ウサギに向かっている。身分上、本物の友達といつものを知らない僕にとって、この時抱いたのは新鮮な気持ちだつた。

ディーを危険に晒せないといつ。

「僕が行けばいいんですか？」

椅子から立ち上がり、僕は白ウサギの目をまっすぐに見て言った。驚いたディーの表情も視界の端に映る。

「ラズ、だめだよ！女王はこいつらよりも気が狂つてゐんだ！」

「いづらといつて指されたのは帽子屋と三月ウサギだ。それだけで、その女王がかなり変わった人物なのだと確信できる。

「大丈夫だから、ディーはここで待つて。僕は何もしないんだから、すぐに戻つてこられるよ。」

「僕はダムだよ。」

ダムの言葉を無視して、僕は白ウサギの元へと移動した。後ろでまだダムが叫んでいたが、トランプ服の少年たちに押さえつけられていて、僕の方へは来れないらしい。

ダムを安心させるよう小さく微笑んで、僕は白ウサギの行軍と共にそのパーティ会場を後にした。

「お前がラザフォード・ノクターンか？」

真っ赤な口紅の綺麗に塗られた唇から出た言葉はおそらくここにいる全ての者を威圧する。

今、僕は白ウサギに連れられてやつてきたハートの城の大広間で、城主である女王陛下の前に立つていた。黒い短めの髪に真っ赤でたくさんのハートが描かれているドレスを着た女王陛下は、僕が今まで見たどの人間よりも整つた顔をしていて、それはまさに造形物のようだった。ただ一つ問題があるとすればそれは……。

「は、はい。じょ、女王陛下…………？」

「ああ、お前はなんと美しい顔をしているのだろう。ワタシが見込んだ通りだ。」

女王陛下はうつとりと僕の顔を見つけてきて、背筋に何か嫌な汗が伝う。これで絶世の美女に見つめられたとなれば僕だって男なのだから顔を赤くするなり反応を示せるだろう。しかしくら美しいといつても彼に見つめられれば、顔面を赤くではなく白くしてしまうのは仕方ないことなのだと思う。

女王陛下は、女装した国王陛下だったのだ。

しかも女王陛下は僕を見つめるだけで何も言つてこない。恍惚と

した表情で、僕を見つめるだけだ。ものすじへ居心地が悪い。

「あ、あの、それで、僕が何か……？」

あまりの静けさに耐えきれず、恐る恐る質問する。女王陛下の様子から、僕が何か罪を犯したようには思えないが、見つめるためだけに呼び出したわけではないだろう。

「ああ、そうだ！お前には見せてやる。ワタシの美しいコレクションたちを！」

僕の質問が聞こえていなかつたのか、女王陛下は手を叩き、白ウサギが広間を後にする。コレクションを見れば返してもらえるのだろうか。ダムの言つ通り、あまりまともな人ではないらしい。見た目も中身も。

そして白ウサギがトランプ兵を引き連れ広間に戻つてくると、女王陛下は玉座から降り、僕を白ウサギたちが持つている箱へと向かせる。肩に置かれた手の、マニキュアのあまりの赤さに少し寒気がした。

「これがワタシのコレクションたちだ。見せてあげたのはお前が初めてだよ。」

これを見れば帰られる。そう信じて、僕は白ウサギの持つ箱を見つめた。

白ウサギが箱を開け、トランプ兵もそれに続いた。

「つーつー！」

声にならない悲鳴。田の前には金の髪と青白い顔。そして滴る赤い血。

「今のお気に入りはこの子だつたのだけじね。お前のほうがこの何倍も美しいよ、ラザフォード・ノクターン。」

女王陛下のコレクションは、美少年の生首。それを理解して、女王陛下の僕を見る田が新たなコレクションに歓喜しているのを知った。

「ふふ、お前はこの子たちの何倍もかわいがつてあげよ。飽きたまでベッドと共に寝てあげてもいいし、美しい髪飾りで着飾つてある

げてもいい。お化粧もしてやろう。ああ、美しいラザフォード・ノクターン。お前がここに来たことにだけはあの娘に感謝せねばならぬ。」

そつと首をなでられ、女王陛下を振り払う。初めて見た生首と、自分のその姿を想像し、胃液が逆流しそうになる。もつれる足での場を逃げようとするが、もちろん逃げられるはずもない。すぐにトランプ兵たちにとらえられ、頭が女王陛下の前に差し出されてしまった。

女王陛下は手に大きな斧を持っていた。処刑人が持つような、首でもバターのように簡単に切れそうな大きさだ。薔薇の彫刻が彫られた刃は綺麗に手入れされているのか、まるで新品のように光る。「いつもは白ウサギにさせているのだけれど、お前は特別だ。ワタシがこの手で、美しい首だけの姿にしてあげる。」

それがご褒美であるかのように、女王陛下は微笑んだ。

彼の華奢な腕が斧を後ろに振りかぶる。

かちやりと。それは極めて静かな音だった。広間の大きく豪華な両開きの扉が大きく開かれる。そこから伸びる赤絨毯の中央を、左右に双子の少年たちをつれたワンピース姿の少女が歩く。

「ビィ……。」

たつた数時間ぶりながら、一生よりも長く会つていよいよに思えた。

ビィの後ろにいたピンクの髪と猫の耳をした少年が、広間の隅にまで聞こえるほどの大きな声をあげる。

「ここに、新たな女王の即位を宣言する！ チュシャ猫はここに在らせられるヴィオレッタ・ノクターンを、新たなハートの国の女王に宣言する！」

「なつ……！？」

女王陛下の派手に化粧が施された瞳が大きく見開かれる。彼の手から大斧が滑り落ち、広間にその鈍い音を響かせた。

トランプ兵たちのざわめきが徐々に大きくなっていく。ただ一

人の猫耳青年の宣言に、そこまでざわめくのは何故だ？

「静肅に。」

白ウサギの一言で、騒ぎになりかけたトランプ兵たちは一斉に静まり返る。

そして白ウサギは青年と向かい合つた。理由を問うていいように。

それを見た青年は、にんまり笑う。

「その女王陛下は男である！よつてチエシャ猫はこの、ヴィオレッタ・ノクターんを女王陛下に任命する！」

今度こそ、本当に広間は静まり返つた。いや、チエシャ猫の笑い声だけはしつかり響いている。

そして白ウサギは頭を抱え、膝を折つた。

「まさか……あの方が男……だと……っ！？」

その叫びを皮切りに、トランプ兵たちもが泣きわめき、怒りを露にする。

誰も……彼が男だとは思わなかつたのだろうか……。

ここにいて、みなが落ち着くのを静かに待つていたのは、僕とビィ、ただこの騒ぎに驚いていた双子と、女王陛下、いや前女王陛下だけだった。

チエシャ猫は女王の飼い猫で、飼われる相手を選ぶ権利があるのだとビィから聞いた。

前女王陛下が無類の女嫌いで、国中の女を首なし死体にしたために、彼が男とわかつてもチエシャ猫は他の女王を選べなかつたのだという。

「まさか僕が男に飼われるなんて、拷問もいいところだらう？公爵夫人もいなくなつてしまつて、困つていたんだ。」

そのチエシャ猫の前に現れたのが、ビィだった。

「女であれば誰でもいいわけじやないけれどね、ビィは若さも愛らしさも申し分なかつた。絶対に逃がすわけにはいかないね。」

なんだかナンパの講釈を受けているような気分だが、前女王陛

下は連れていかれ、僕が助かったのは事実だった。

しかし、ビィがこの国の女王陛下になってしまったのも事実だ。

ビィの今後について考えを巡らせていると、肩を叩かれた。振りかえると、瞳に溢れそうなほど涙を浮かべた双子の兄弟がいた。

「僕、だから行っちゃダメだって行つたのに……女王は首切りが趣味なんだから、僕らだって何度も切られそうになつたんだよ！」

「ここに住んでる男なら女王陛下に近づかないのは常識だよ！ラズのバカ！」

泣きながら、ものすごい勢いで怒鳴り付けられる。

首が切られるとわかつていれば絶対に近づかなかつたのだが、それでも心配してくれていたのはわかる。

「ごめん。もう絶対にしないよ。約束する。」

素直に謝ると、双子は照れたように顔を見合せた。

「えらく双子たちがなついたね。まあそれもわからなくもないかな。君は僕の美しく愛らしい女王の弟だものね。」

チエシャ猫はビィを後ろから抱き締めて離さない。猫だと思えば可愛らしき行為だが、猫耳青年だと思えば、今すぐ引き離すべきか迷う。

「女王陛下。」

再会に盛り上がる僕たちに話しかけたのは、無表情に戻つた白ウサギだ。どうやら前女王陛下が男であつた事実は乗り越えられたらしい。

「ご即位、おめでとうございます。わたくしは白ウサギ。この城の宰相でござります。」

胸に手をあて、物々しく白ウサギは挨拶する。そこでやつと、ビィがこの国の女王になつてしまつたのを思い出した。

宰相ってなに？などと耳打ちしてきたビィに勤まるのかどうかは置いておくとして。

「やつ、宰相さんね！」

ビィはさもわかつていたように囁く。

「でもあなた、全然白ウサギらしくないわ。白ウサギはもつと可愛くないと！あなたの話し方はほつちの使用者のじいよりもおじいさんみたい！」

びしつと指を白ウサギに突きつけた、ビィは女王らしい偉そうに言い放った。

「これからその話し方は禁止よー可愛い話し方じゃなことお返事してあげないわ。」

ビィの初めての命令だった。帽子屋たちがいればきっと「ビィ女王陛下の初めての命令記念パーティー」を開催しようとしただろう。

今までそんな命令を受けたことがなかつたのだろう、白ウサギは田を見開いたまま、固まつてゐる。

「あの……ビィが無茶を言つのはいつものことですから……。」

恐る恐るフォローした僕に、白ウサギは「いや……」ととても複雑そうに首を横に振る。

「ぜ、善処しま……。」

「ほり！全然可愛くない！そこは、ボク頑張るよーって可愛く言つとこひるよー！」

「ボ、ボ……ボク……つー？」

善処するところだけで精一杯だった白ウサギはもはや赤ウサギと言つても過言でないほどに顔を赤くしてしまつてゐる。

結局、ボク頑張るよと両手を握りしめるポーズまで付けて言えるようになるまでが迷子になつていていた時間よりも遥かに長かつた。

「でも、女王陛下に即位したつてことは、ビィはほんとうといなあやいけないのかな……。」

誰も言わない疑問を口にする。ビィも少し顔を伏せた。先程までの楽しそうな笑顔は、もうない。誰も言わないといふことは当然と言つことで、もうビィは父様や母様のいる屋敷に戻ることは出来

ない。そう思つてはいたのだけれど……。

「ビィがここにいたいのなら、ここにずっととこいられるわ。でも帰りたいなら帰れるよ。」

この場にいた、この国の住人たちは声を揃えてそう言つた。白ウサギだけは、これをどういえば可愛くなるかを眞面目に考えていたようだが。

「女王陛下の言葉は絶対なんだ。」

「だからあいつだって好き勝手してたしね。」

双子がそう言って、そこにいたみんなが女王陛下の言葉を待つ。ビィは大きく頷いて、満面の笑顔をみなに向けた。

「私はここにいるみんなが大好きよ。でも、おうちでいるパパもママも使用人たちもみんな大好きなの。私はみんなとずっと一緒にいたいわ！」

わがままなビィの願い。それを聞いたチエシャ猫がにんまり笑う。

「さすが僕の女王陛下。やつぱりお願ひはたくさんないとね。」

白ウサギも小さく笑つている。

「わたしもあなた様になら永遠にお仕えしたく……あ、いいえ、えー……ボ、ボクもずっとビィと一緒にいられれば……。」

顔が再び真っ赤になつている白ウサギを見て双子がからかうようになに笑う。

「僕らは友達だもん！離れたいって言われたつて離れないよ！」

「せつかく会えた、気が狂つてない友達だよー。ずっと一緒にいるさ！」

その場にいたみんなが頷き合い、チエシャ猫がビィの元へと歩み寄る。

「では女王陛下、そして弟君も田を瞑つて。あなたたちの大好きな人たちの元へ、お帰りください。もちろん僕らは永遠に共に。」

チエシャ猫の声は段々と遠退いていく。

「 ゃま ぱつちやま 」

懐かしい呼ばれ方だった。自分のことだと理解するまでに時間がかかつたが、それでも閉じた瞼を開き、眩しい光にまた閉じる。

香る匂いは森のものとはまったくがつた。

「 ぱつちやまも、嬢ちやまも、お昼寝ならお部屋でなさってくださいな。」

聞きなれた呆れ声に完全に意識が屋敷の庭へと戻される。

勢いよく起き上ると、僕の前には鮮やかな緑の芝生が広がっている。

僕が起きたのを確認した侍女は、続けてビィの肩を揺すつている。

「夢.....？」

妙にリアルだった、あの冒険が.....? 今でも思い出せる、深い森に、わけのわからないティーパーティ、そして友人たちの笑い声。それらが全て嘘だとは思えない。

ビィは僕よりも緩慢な動作で起き上がり、周りを見渡した。

「 ねえ、みんなはどこに行つたの？」

起き上がったばかりの寝惚け眼のビィは当然のよつこ「みんな」と言ひ。それだけで、なぜだかすゞくつれしくなつた。

「 寝ぼけてらつしやるんですか? 旦那様がティーサロンでお待ちですよ。お客様がいらしてますから.....ビィ様は鏡を見てから向かいましょうね。」

長髪のビィは髪が乱れてしまつていて、それをみた侍女は大きくため息をついてビィと僕を白室へと引っ張つて行く。

白室にいたのは、昔からうしごとにいる飼い猫のダイナだ。しかし白猫のはずのダイナは今、見る影もない色に染まつてしまつていて。「まあ、ダイナ! すっかりピンク色になられて.....ビィ様ですか?」

絵具を出しつぱなしにされたのは……ですからあれほどあちこちとお片づけをなさつてくださいと言つておりますのに……。」

侍女はダイナを慌てて抱きかかえようとしたが、ダイナはすらりとすり抜け、ビィの足元にすり寄る。侍女の小さな悲鳴と「ああ、洗濯物が増える……。」というかなしげな声を無視して。

「チエシャ…………？」

ダイナがにんまり笑つた気がした。

それだけではなかつた。ビィのベッド脇には見覚えのあるシルクハットと、やや顔が下向きなオレンジのウサギのぬいぐるみが居座つていて、その下にはトランプ柄のクロスが敷かれている。

「お待たせ、ラズ！ 行きましょう。」

新しいワンピースに着替え、髪も結つたビィが嬉しそうに僕の周りで数回ターンしてみせる。その髪には白いウサギの髪留めをつけている。

夢じゃない。

みんなはビィと、僕と共にいる。でもまだ、一番共にいたい一人がいない。

父様はすでにティーサロンにいた。見知らぬ男性と話をされるつが、すごく楽しそうだった。

「父様。お待たせして申し訳ありません。」

僕らの到着を知り、父様は席を立ち、僕らを男性の前に立たせた。男性はすぐ優しい表情で僕に握手を、ビィには手の甲にキスをして挨拶をしてくれる。

父様の仕事の関係で親しくなつたといつその男性には僕らと同じくらいの年の子供がいるそうで、家族ぐるみで付き合いをと今田屋敷を訪れてくれたのだという。

「ほら、恥ずかしがつてないで、お一人に挨拶しなさい。」

男性の後ろに隠れていた、子供たちは同じ顔をした男の子たちだ

つた。

二人の顔を見て、ビィと僕はあの一人のようすに顔を見合わせる。

「はじめまして、ディーアル・ルードと申します。」

「ダミエル・ルードと申します。」

同じ動きでお辞儀する一人。彼らも共にいてくれた。

僕とビィは両手を差し出し、一人の手を取る。そして双子のようすに声を揃えた。

「これから、よろしくね！ディー、ダメ！」

【】

(後書き)

〆切間近に書いてしまい、とても消化不良でしたが、一応提出した
そのものをこちらに投稿させていただきました。

あらゆるところで、「気に入らないところ（チョ・シャ猫がなぜそんな
権限を持っているのか、主人公がラズである意味はないのではないか
のか等）」ありますが、みなさんのご意見を聞いて、修正していくけ
らと思っています。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129m/>

ワンダーランド・ファンタジー

2010年10月28日05時41分発行